

February 2022  
会員連絡 No.30

The Society of Cardiovascular Endocrinology and Metabolism

# 日本心血管内分泌代謝学会

- ご挨拶：理事長の挨拶/退任理事
- ご案内：第26回日本心血管内分泌代謝学会学術総会
- ご報告：第25回日本心血管内分泌代謝学会学術総会  
受賞者紹介 高峰譲吉賞/高峰譲吉研究奨励賞/若手研究奨励賞  
第25回評議員会・総会
- 各種名簿

## 【第26回日本心血管内分泌代謝学会学術総会】

会長：向山 政志

事務局

〒860-8566

熊本市中央区本荘 1-1-1

熊本大学大学院生命科学研究部 腎臓内科学講座

TEL : 096-373-5164 FAX : 096-366-8458

学会 URL : <https://c-linkage.co.jp/CVEM2022>

日本心血管内分泌代謝学会  
事務局

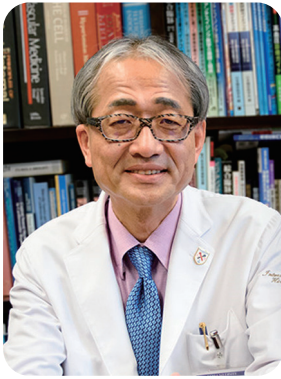
〒600-8441 京都市下京区新町通四条下る四条町343番地1  
タカクラビル6階 一般社団法人日本内分泌学会 内  
TEL : 075-354-3562 FAX : 075-354-3561 E-mail : [cvem@endo-society.or.jp](mailto:cvem@endo-society.or.jp)



# 目次

---

理事長のご挨拶	2～3
第 26 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会のご挨拶	4
理事退任・功労評議員就任のご挨拶	5～6
第 25 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会 開催報告	7～8
第 25 回日本心血管内分泌代謝学会受賞者プロフィール	
・ 第 25 回高峰譲吉賞	9～10
・ 第 25 回高峰譲吉研究奨励賞	11～14
・ 第 25 回若手研究奨励賞	15～19
名簿	
理事・監事・幹事	20
名誉会員	21
功労評議員	21
評議員	21
2021 年度新入会会員	21
第 25 回日本心血管内分泌代謝学会評議員会・総会議事録	22～26



----- 理事長からのメッセージ -----

## WITH コロナ時代： CVEM RE-BORN への期待

慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科

伊 藤 裕

2022 年が幕を開けました。わたくし、伊藤裕は、2019 年、日本心血管内分泌代謝学会（The Society of Cardiovascular Endocrinology and Metabolism, The CVEM Society）第 8 代理事長を拝命いたしました。2021 年より、二期目を務めさせていただくこととなりました。ブレることなく、「CVEM は、Non-Communicable Diseases (NCDs) 医学の王道」であるとの信念のもと、更なる学会の発展に尽くしたいと考えております。ここに謹んで、皆様方のご支援を賜りたく存じます。ワクチンの普及で、第五波で収束するかに見えた COVID-19 であります。変異株オミクロンの登場で、再び猛威を振るうこととなり、この先どうなるか、全く不透明な時代を我々は生きています。しかし、2022 年は、寅年、トラには、逆境のなか、困難に立ち向かう姿が象徴されています。ピンチのなかにこそチャンスがある、虎穴にいらずんば虎児を得ず、と、考え、より闊達充実した学会活動を皆さんとともに創っていきたいと考えております。よろしくお願いたします。

学会は、WITH コロナ時代、CVEM の New Normal を模索しております。20 世紀末、日本人科学者により発見された多くの心血管ホルモンに関する研究をベースに設立された CVEM がありますが、今日まで、ナトリウム利尿ペプチド、エンドセリン、アドレノメジュリンやオレキシンなどが極めて迅速に臨床応用されてきました。最近では、レニンアンジオテンシン系抑制とナトリウム利尿ペプチド系の作用増進作用を持つ ARNI（アンジオテンシン受容体ネプリライシン阻害剤）が登場し、心不全、さらに、高血圧への臨床適応が、昨年なされました。このように CVEM 領域は確実に進歩していますが、専門医制度の変革の中、特定の臨床疾患を有しない臨床学会（内分泌学会分科会の立場）としての問題点を抱えています。

第 25 回（2021 年度）学術総会は、CVMW2021 心血管代謝週間として、久留米大学分子生命科学研究所、児島将康会長により 2021 年 12 月 10 日（金）～11 日（土）に日本血管生物医学会、国際心臓研究学会日本部会（ISHR）、高血圧疾患モデル学会、心筋生検研究会の 5 学会合同で、完全 Web 形式で開催されました。

とくに、「Beyond Discovery：日本で発見されたペプチドホルモンとその臨床応用」では、25 回の節目にふさわしく、ペプチドホルモンを発見された 4 名の CVEM 会員の先生方（南野直人、柳沢正史、北村和雄、児島将康）が講演され、オンタイム視聴の参加総数は 400 名を超えました。本年は、第 26 回（2022 年度）学術総会が、熊本大学、向山政志会長のもと、わたくしが会長を務める、国際高血圧学会（ISH）2022 京都のサテライトとして 2022 年の 10 月 12 日（水）（会場：京都国際会館）に、「CVEM, the Past, Present, and Future」のテーマで、現時点では、オンラインでの実施が計画されています。また、ARNI の臨床応用や CNP アナログが昨年 8 月軟骨無形成症治療薬として EU、米国で承認されたことなどを受け、ANP 発見 38 年目で、ナトリ

ウム利尿ペプチドの国際シンポジウムも企画されつつあります。

NCDs 全般にわたる疾患群をカバーする極めて横断的な学問領域を扱う CVEM の特性を鑑み、過去、CVEM 学術総会の多くは、他学会、特に循環器系の学会との合同で開催され、より多くの方との交流のなか、より豊富な情報を得ることが目指されました。いっぽう、WITH コロナ時代となり、WEB 開催が常態となり、その利点も多くの方が体感するようになりました。今後、学会開催においても、ビフォーコロナ時代の形式に全く戻るといえることはありえないと思います。その中で、CVEM を、単体で WEB 開催する意見も検討されるようになっていきます。学会員が、専門医制度の縛りの中、それぞれの専門領域の学会の参加を優先するあまり、CVEM への参加が抑制される傾向があります。WEB での参加であれば、参加が容易になるのではないかと、練られたネットでの意見交換の場が作られれば、若手同士のつながりを強化できるのではないかと期待からです。一方、Web 開催にすると、ただ聴講するだけになりがちで、若い人達が学会にコミットして運営に参加しようという意思が育たない、そして、なによりフェーストゥフェースの良さが失われるという懸念もあります。

そこで、第 27 回（2023 年度）学術総会会長は、デジタル技術に通じておられる下澤達雄理事（国際医療福祉大学 成田病院 臨床検査科）にお務めいただくことになりました。下澤先生はこれまでにない全く新しい学会開催形態を計画されています。すなわち、総会開催を特定の一時期に設定することなく、通年で、複数回にわたり、WEB 配信する形で総会を実施するというものです。通年に亘り CVEM 領域での最先端の知見に触れ、そして、より多くの機会に学会員の議論が生まれることが期待されます。

このような、斬新な学会の運営を試行しながら、今後、CVEM の再生、RE-BORN を目指していきたいと考えております。

“Quo Vadis CVEM?”（CVEM の存在意義は果たしてあるのか。あるとすれば、どこへ向かえばいいのか？）—ひきつづき、皆様とともに、“密に” 議論を重ね、皆様のためになる、CVEM の新環境を作り上げていきたいと考えております。学会員の皆様におかれましては、このような学会の現状をご理解いただき、引き続き、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



## 第26回日本心血管内分泌代謝学会学術総会 (CVEM2022) 開催のご挨拶

会長  
熊本大学大学院生命科学研究部 腎臓内科学 教授  
向山 政志

この度、第26回日本心血管内分泌代謝学会学術総会を International Symposium on Cardiovascular Endocrinology and Metabolism と合同開催という形で2022年10月12日(水)、国立京都国際会館を会場として開催致します。

これまでCVEMはしばらく、循環器・代謝・内分泌などに関係している国内の学会が幾つか集まって心血管代謝週間(CVMW)という形で共同開催し大変好評でありましたが、今回は第18回学術総会(横浜、梅村 敏会長)以来、8年振りの単独開催となります。とはいえ、直後の10月12日夕から16日にかけて国際高血圧学会(ISH2022 Kyoto)が大々的に行われるため、その先鋒を切った開催という意味も含んでおります。そのため、今回は特に国際色豊かなものにすべく、招待講演やシンポジウム、受賞講演、YIA 審査講演はすべて英語の発表としています。国内参加者は現地参加を基本としていますが、コロナ禍の終息がなかなか見通せない状況の下、開催形式をWeb併用のハイブリッドとする予定で、海外演者も比較的参加しやすいような環境にしたいと考えます。またそれ以外に、従来通りの日本語でのポスター発表も設けており、若手企画や協賛セミナーを含め、学会を盛り上げていきたいと思っております。

CVEM2022のテーマは、“CVEM, the Past, Present, and Future”としました。実際、CVEMの歴史を振り返ると、ナトリウム利尿ペプチドやエンドセリンの発見に始まってこの40年間で大きく進展を遂げ、臨床応用が展開されてきました。そして、それら多くの研究を我が国の研究者が牽引し世界に貢献してきました。本学会では、CVEM領域研究の流れを理解、議論するとともに、今後CVEMが進むべき方向性についても討議していきたいと考えます。そして、海外からの参加者には、日本に学際的で興味深くかつ極めて高いレベルの学会があることをアピールできればと思っております。

新専門医制度がスタートして、専門医制度を持たない学会の会員数が若手中心に減少傾向にあります。しかし、本学会は基礎医学・臨床医学が融合し、極めて高い学術レベルを維持しているとともに、専門分野にとらわれない自由な発想・研究方法を学ぶのに大変よい機会となっています。本学会が会員の方々に満足していただけるよう関係者一同一丸となって準備しながら、皆様とお会いできるのを楽しみにしています。2022年秋、是非京都でお会いしましょう！

### 〈開催概要〉

会議名称：第26回日本心血管内分泌代謝学会学術総会  
International Symposium on Cardiovascular  
Endocrinology and Metabolism と合同開催  
(CVEM2022)  
会期：2022年10月12日(水)  
会場：国立京都国際会館  
〒606-0001 京都市左京区岩倉大鷲町422番地  
ホームページ：<https://www.c-linkage.co.jp/CVEM2022/>

CVEM International Symposium on Cardiovascular Endocrinology and Metabolism  
**CVEM2022**  
The 26th Scientific Session of the Society of  
Cardiovascular Endocrinology and Metabolism  
第26回 日本心血管内分泌代謝学会学術総会  
CVEM, the Past, Present, and Future

Date **October 12, 2022 (WED)**  
Venue **Kyoto International Conference Center**  
国立京都国際会館  
Chair **Masashi Mukoyama, MD, PhD**  
Department of Nephrology  
Kumamoto University Graduate School of Medical Sciences  
熊本大学大学院生命科学研究部 腎臓内科学講座 向山政志

Secretariat of CVEM2022 c/o Connection Linkage, Inc. Kumamoto Branch  
〒860-0815 2F 217 Shimo-Ogino 2-Cho-84, Kumamoto-City, Kumamoto, 860-0815 Japan  
TEL: +81-96-268-0882 FAX: +81-96-268-0883 E-mail: cvem2022@c-linkage.co.jp  
CVEM2022運営事務局：株式会社コンネクションリンクエッジ  
〒860-0815 熊本県熊本市中央区東下町1-1-1 東下町ビル402号  
TEL: 096-268-0882 FAX: 096-268-0883 E-mail: cvem2022@c-linkage.co.jp | <http://www.c-linkage.co.jp/CVEM2022>

北村 和雄 先生 (国立大学法人宮崎大学 フロンティア科学総合研究センター プロジェクト研究部門)



略歴

1980年	宮崎医科大学医学部医学科卒業
1984年	宮崎医科大学大学院医学研究科修了 (医学博士号取得)
1985年	宮崎医科大学附属病院医員
1986~1988年	University of Texas Southwestern Medical Center 留学
1988年	宮崎医科大学内科学第一講座助手
1995年	宮崎医科大学第一内科講師
2006~2021年	宮崎大学医学部内科学講座循環体液制御学分野 教授
2021年	宮崎大学フロンティア科学総合研究センター 特別教授

—— ご挨拶 ——

2021年の第25回日本心血管代謝学会学術総会で理事を退任しました。本学会には創立以前に内分泌学会のサテライトシンポジウムとして開催されていた時から毎年参加させていただき、多くのことを勉強させていただきました。教授になってからは理事に就任させていただき、さらに2016年から4年間理事長を務めさせていただきました。また、2015年には第19回CVEMを会長として一回目の心血管代謝週間(CVMW)の中で開催させていただきました。CVMWは、当該年度の循環器関連の4学会学術集会を、共同開催したものでした。その後、第19回~第25回のうち6回がCVMW形式で行われております。CVMW方式にすることで資金的な面が楽になることに加え、他学会との交流ができるなどの良い面もありますが、日本心血管代謝学会自体の独自性や内分泌学会の分科会としての意義に問題が生じるようにも思いました。

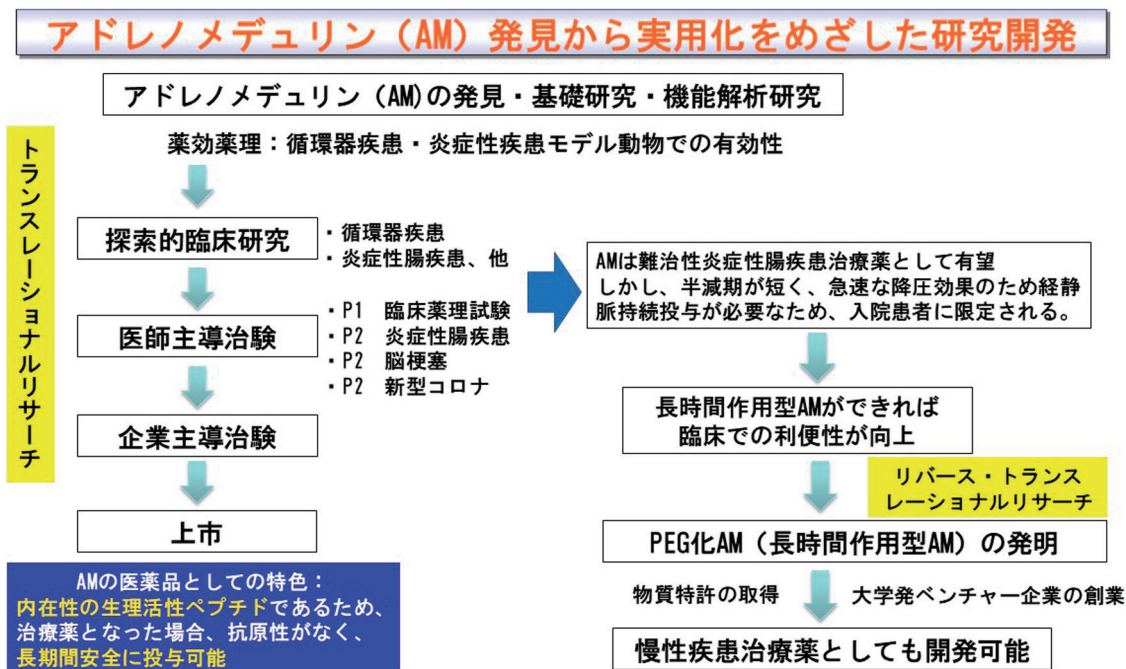
私自身は宮崎医科大学の最初の卒業生で大学院では松尾壽之先生、寒川賢治先生のもとで生理活性ペプチドの研究を指導していただきました。松尾先生、寒川先生の教室からはナトリウム利尿ペプチドファミリーをはじめ多くの生理活性ペプチドが発見され、日本心血管代謝学会発足の礎になったと思います。そのような中で、私自身もなにか新たな生理活性ペプチドを発見して臨床応用をめざしたいと思うようになっていました。留学から帰国後の約4年の歳月をかけてアドレノメデュリン(AM)を発見できたのは幸いでした。AMの発見後は基礎研究や臨床研究を進めましたが、常に医薬品や診断薬として実用化することを目指してきました。私が教授になる少し前に薬事法の改正があり、医師主導治験が実施できるようになったことも幸いし、自らが発見した生理活性ペプチドでPhaseI~PhaseIIの医師主導治験を実施するという貴重な経験を積むことができました。

また、AM自体は内因性の物質で良い面もありますが、半減期が短く安定性が悪いなどの問題があり、臨床応用の障壁となっています。これらの欠点を改善し、臨床での利便性の良い化合物に改良する研究を推進し、PEG化AMなどの新たな医薬品候補物質を発明しました。このような研究はリバーストランスレーショナルスタディと言われるもので、診療や臨床応用の問題点を解決する基礎研究を推進することで、将来的には臨床に還元できるシーズの発明に繋がります。

しかしながら、AMおよびPEG化AMはまだ上市されておらず、医薬品としての開発は道半ばであるため、私自身は理事退任後も日本心血管代謝学会の功労評議員・研究者として研究開発を進めたいと思っております。

今後さらに日本心血管内分泌代謝学会を発展させるためには、心血管内分泌代謝学の研究を推進することで、新たな学問分野を切り開いていくことが重要であると思います。そのためには臨床での診断や治療に結びつく可能性のある優れた研究成果を発信し、トランスレーショナルリサーチを推進するとともに、生体のシステムや病気のメカニズムを深く理解することが大切だと思います。これらの方向性は医学研究に広く通じることであり、本学会の存在意義は高いと確信しております。

日本心血管内分泌代謝学会の益々の発展を祈念いたします。



# CVMW2021 を終えて

第 25 回 日本心血管内分泌代謝学会学術総会

会 長 児 島 将 康

会長付幹事 佐 藤 貴 弘

第 25 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会（会長 久留米大学分子生命科学研究所 児島将康）は、

第 29 回日本血管生物医学会学術集会（九州大学大学院薬学研究院 米満 吉和）

第 38 回国際心臓研究学会日本部会（山口大学大学院医学系研究科器官病態内科学 矢野 雅文）

第 57 回高血圧関連疾患モデル学会学術総会（信州大学医学部分子病態学 沢村 達也）

第 43 回心筋生検研究会学術集会（長崎大学大学院医歯薬総合研究科循環器内科学 前村 浩二）

とともに 2021 年 12 月 10 日（金）と 11 日（土）に CVMW2021 心血管代謝週間として共同開催致しました。統一テーマは「融合科学の基盤領域としての心血管研究：その新しい価値の創造」としました。

本会は当初、久留米シティプラザにおいて現地開催予定でありましたが、COVID-19 の感染状況を勘案し、完全 WEB 開催となりました。開催形式は以下の通りです。

2021 年 12 月 10 日（金）～11 日（土） ライブ・オンタイム配信

2021 年 12 月 20 日（月）～2022 年 1 月 20 日（木） オンデマンド配信

WEB 開催とはなりましたが、多くの研究者の方々から心血管内分泌代謝領域の最新の研究を多数ご発表頂きました。特別講演では、小室一成先生（東京大学大学院医学系研究科循環器内科学）から「これからの循環器研究」、野田昌晴先生（東京工業大学科学技術創成院）には「脳内 Na センサーによる水分/塩分摂取行動と血圧の制御」、そして北村和雄先生（宮崎大学フロンティア科学総合研究センタープロジェクト研究部門）には「アドレノメデュリンのトランスレーショナルリサーチ」という演題でご講演を頂きました。

5 学会の合同シンポジウムでは、合同シンポジウム 1 が「新型コロナと循環器系関連」として、タイムリーな新型コロナと循環器についてのシンポジウムを企画しました。またシンポジウム 2 として「Beyond Discovery：日本で発見されたペプチドホルモンとその臨床応用」を企画しました。とくにシンポジウム 2 ではペプチドホルモンを発見された 4 名の CVEM 会員の先生方（南野直人、柳沢正史、北村和雄、児島将康）にお話しいただき、第 25 回という CVEM 学術総会の節目に相応しい内容であったのではないかと思います。

また若手主催シンポジウムとして「心血管内分泌研究の最前線」と題して 4 名の先生方（井田隆徳、大谷健太郎、野村征太郎、河原崎和歌子）にお話しいただきました。若手の先生方の活発な研究発表と討論が、将来に向けてとても頼もしく思いました。

各賞の受賞者は以下の通りです。第 25 回高峰譲吉賞は栗原裕基先生（東京大学）、第 25 回高



峰讓吉研究奨励賞は鮎澤信宏先生（東京大学）と小山晃英先生（京都府立大学）、YIA は石塚理人先生（東京大学）、片桐美香子先生（東京大学）、川上亮先生（群馬大学）、木塚貴浩先生（佐賀大学）、杉田純一先生（東京大学）（五十音順）の5名の先生方です。誠にありがとうございます。

第24回に引き続き、今回も完全WEB開催となりましたので、会場での議論および懇親を深めることは叶いませんでした。しかしオンタイム視聴の参加総数は400名を超え、オンデマンドと合わせますとほぼ例年通りの参加者数となるのではないかと思います。関係者一同皆さまのご協力に深く感謝申し上げます。

次回、第26回日本心血管内分泌代謝学会学術総会は「CVEM, the Past, Present, and Future」のテーマで、向山政志先生（熊本大学大学院生命科学研究部 腎臓内科学分野）を会長として国際高血圧学会とタイアップして国立京都国際会館で令和4年10月12日に開催予定です。次回もまた皆様のご協力をどうかよろしくお願い申し上げます。



栗原裕基先生（東京大学）



鮎澤信宏先生（東京大学）



小山晃英先生（京都府立医科大学）



上段右端：川上亮先生（群馬大学）  
 中段左端：杉田純一先生（東京大学）  
 中段中央：片桐美香子先生（東京大学）  
 中段右端：石塚理人先生（東京大学）  
 下段中央：木塚貴浩先生（佐賀大学）

## 第 25 回日本心血管内分泌代謝学会受賞者 プロフィール

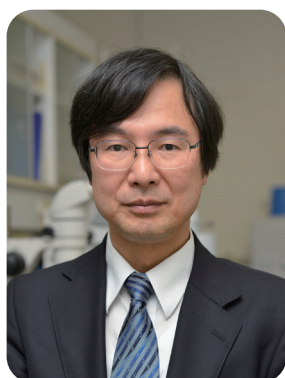
第 25 回日本心血管内分泌代謝学会研究賞を受賞されました先生方のプロフィールを掲載いたします。

----- 高峰讓吉賞受賞者 -----

栗原 裕基 先生（東京大学大学院医学系研究科代謝生理化学分野教授）

受賞研究テーマ

「心臓血管発生における細胞間連携機構の研究」



### 略歴

昭和 58 年（1983 年）	東京大学医学部医学科卒業
昭和 58 年（1983 年）	東京大学医学部附属病院内科研修医
昭和 59 年（1984 年）	三井記念病院内科医員
昭和 62 年（1987 年）	筑波大学基礎医学系薬理研究生
昭和 62 年（1987 年）	東京大学医学部第三内科医員
平成 2 年（1990 年）	日本学術振興会特別研究員（PD）
平成 3 年（1991 年）	東京大学医学部附属病院助手
平成 4 年（1992 年）	スタンフォード大学心臓血管研究所ポスドク
平成 5 年（1993 年）	東京大学医学部附属病院助手
平成 12 年（2000 年）	熊本大学発生医学研究センター細胞識別分野教授
平成 14 年（2002 年）	東京大学大学院医学系研究科代謝生理化学分野教授

—— 受賞によせて ——

この度は高峰讓吉賞受賞の榮譽に与り、日本心血管内分泌代謝学会理事長の伊藤 裕先生、本年大会長の児島将康先生をはじめ、選考にあられた先生方に厚く御礼申し上げますとともに、矢崎義雄先生、故眞崎知生先生をはじめこれまでご指導下さいました先生方、研究生活を共にさせて頂きいただいた多くの皆様方に心より感謝申し上げます。

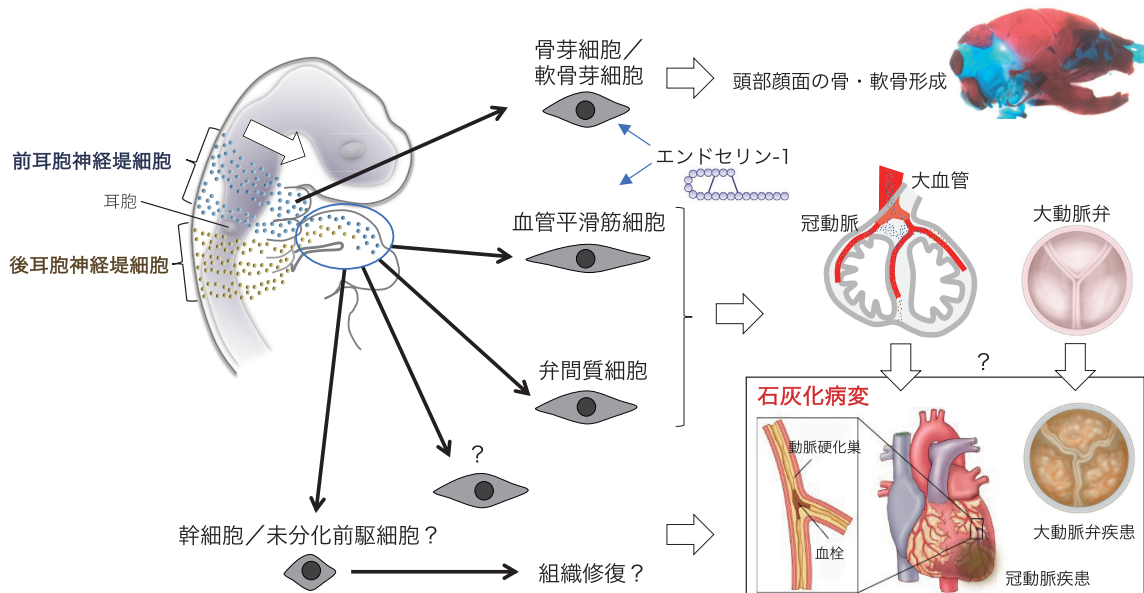
私は 1983 年に東京大学医学部を卒業し、循環器内科の臨床医を志していたのですが、その中で異型狭心症が冠動脈攣縮によって起こることを冠動脈造影によって世界に先駆けて証明された泰江弘文先生のお仕事に出会ったのが、血管の研究に興味をもった第一歩でした。

臨床研修の後、1987 年に私は筑波大学の眞崎知生先生の研究室に国内留学しましたが、眞崎先生のもとで柳沢正史先生や木村定雄先生と出会い、エンドセリンの発見に携わることができたことは私にとって大きな幸運でした。その後東京大学に戻り、矢崎義雄先生の下、児玉龍彦先生、栗原由紀子らとともにエンドセリン遺伝子欠損マウスを樹立し、エンドセリンが中枢性循環調節において降圧因子としての役割を果たすとともに、個体発生において顎顔面および心大血管の形成に関与することを明らかにしたことが、その後の進路を決定づけました。2000 年に臨床医か

ら基礎研究者に転身し、3年間熊本大学に奉職しましたが、恵まれた研究環境とともに泰江先生の存在も熊本大学に惹かれた大きな理由の一つでした。

2002年からは東京大学で発生学を中心に研究を展開し、エンドセリンシグナルが神経堤細胞においてホメオボックス遺伝子 *Dlx5/Dlx6* を誘導し、顎顔面の領域決定を制御すること、頭部由来の神経堤細胞がエンドセリンシグナルによって冠動脈平滑筋を形成すること、頭部顔面形成においてホメオボックス遺伝子群が領域性決定と骨格系分化に寄与することなどを明らかにするとともに、エンドセリン A 型受容体遺伝子異常による先天性ヒト疾患のモデルマウス解析や心臓大血管系における神経堤細胞を中心とした細胞間連携機構の解明、さらには数理科学者との共同研究で、細胞間連携とその動態を基盤とした数理モデリングと実験的検証により、血管新生をはじめとした形態形成の機構解明に取り組んでいます。

昨年はまた、当研究室出身の若手研究者たちが国内外で躍進する年でもありました。免疫学の泰斗である谷口維紹先生から教えていただいたレオナルド・ダ・ヴィンチの言葉に、“Tristo è quel discepolo che non avanza il suo maestro.” という一節があります。「弟子が師を追い越して行けないことほど悲しいことはない」という意味だそうです。弟子に限らず、研究を通して交わりを持つことができた若手研究者の活躍を見るのは本当にうれしいことです。そうした活躍を励みにしながら、今回の受賞を機に私自身も初心に戻り、次世代に夢をつないでいける研究をさらに展開できるよう、これからも尽力してまいりたいと思います。



頭部顔面と心臓大血管の形成に寄与する神経堤細胞および心疾患との関連

受賞者-1

鮎澤 信宏 先生 (東京大学 先端科学技術研究センター  
臨床エピジェネティクス)

受賞演題

「ミネラルコルチコイド受容体を介した間在細胞 pendrin の制御機構」



#### 略歴

2005年	東京大学医学部医学科卒業
2013年	東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻博士課程 修了
2013年	東京大学先端科学技術研究センター 臨床エピジェネティクス 特任研究員
2020年	東京大学先端科学技術研究センター 臨床エピジェネティクス 特任助教

—— 受賞によせて ——

この度は高峰讓吉研究奨励賞を賜り、誠にありがとうございます。本賞は御高名な諸先生方が受賞されてこられた荣誉ある賞であり、身に余る光栄に存じます。

私は大学卒業の後、腎臓内科医としての経験を積む中で全身の循環動態に影響を及ぼす腎臓の機能に興味を持つとともに、当時の腎臓病治療に限界も感じ、基礎研究に携わりたいという気持ちを抱きました。その後、東京大学大学院に入り、ご縁があり藤田敏郎先生と長瀬美樹先生の指導のもとで腎臓病および心血管疾患を含む高血圧性疾患の基礎研究を始めることができました。大学院修了後は東京大学先端科学技術研究センターに移り、引き続き高血圧性疾患の研究に取り組んでまいりました。これまで私を導いて下さいました全ての先生方、特に長年にわたり指導を頂きました藤田敏郎先生に深く御礼申し上げます。

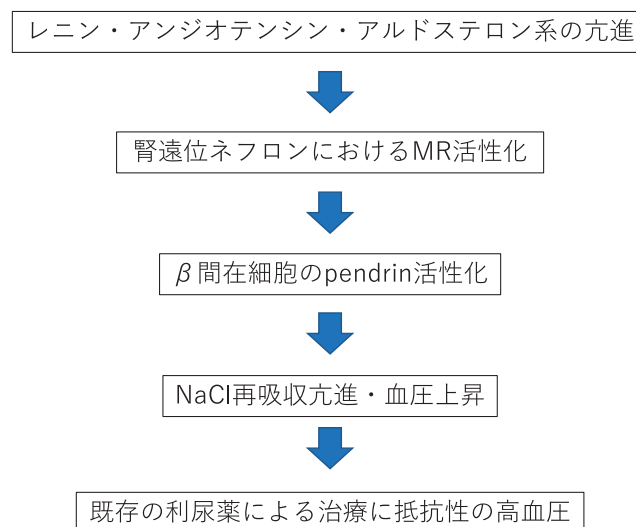
私はこれまでアルドステロンの受容体であるミネラルコルチコイド受容体 (MR) の関係する病態の解明に取り組んできました。MR は古典的には腎臓の遠位ネフロンに発現し電解質や水分の調節に働くことが知られますが、一方で心血管や免疫系などにも発現し、高血圧や関連する臓器障害の形成に関与することが示されています。複数の臨床試験において MR 拮抗薬は心不全や慢性腎臓病、高血圧の治療に有用であることが示されています。大学院時代、私の所属するグループは低分子量 G 蛋白質 Rac1 が MR 活性化を引き起こし、高血圧および関連する臓器障害の発症に寄与することを明らかとしました。私も心筋特異的 Rac1 欠損マウス等を用いた解析を行い、圧負荷性心不全の形成に Rac1-MR 経路が関与することを報告いたしました。この成果の発表により、私は心血管内分泌代謝学会にて若手研究奨励賞を頂くことができ、当時大変勇気づけられたのを思い出します。

その後、腎遠位ネフロンにおける MR の新たな役割を見出すこともできました。遠位ネフロンは尿からの NaCl 再吸収の調節を担い、その機能異常は高血圧の発症に深く関与します。昨今、

同部のうち接合尿細管・皮質集合管の $\beta$ 間在細胞に発現する pendrin が新規の NaCl 再吸収機構として働くことが示されました。Pendrin はレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の亢進に伴い活性化することが知られますが、我々のグループはこの pendrin 制御に MR が関与することを見出しました。私は間在細胞特異的 MR 欠損マウス等を用いて、その詳細な機序を解明するとともに、この MR による pendrin 制御機構が血圧の調節に関与し、特に既存の利尿薬による治療に抵抗性の高血圧の発症に寄与することを証明しました。一連の成果は腎臓における MR の働きについて新知見をもたらすとともに、高血圧性疾患の治療における MR 拮抗薬の新たな意義を見出すものと考えております。

今回の受賞に報いることができるよう、これからも病態解明・治療法の開発を目指して研究を続けて行き、微力ではありますが学会の発展に寄与して行きたいと思っております。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

ミネラルコルチコイド受容体 (MR) を介した $\beta$ 間在細胞pendrinの制御とその意義



受賞者-2

小山 晃英 先生（京都府立医科大学）

受賞研究テーマ：

「アドレノメデュリンの受容体シグナルの解明とバイオマーカーへの応用」



略歴

2007年	岡山大学医学部保健学科卒業
2010年	日本学術振興会特別研究員 DC1
2013年	信州大学大学院医学系研究科 博士課程修了
2013年	国際医療福祉大学福岡保健医療学部医学検査学科助教
2014年	京都府立医科大学大学院地域保健医療疫学助教 附属脳・血管系老化研究センター（兼任）
2021年	京都府立医科大学大学院地域保健医療疫学講師

—— 受賞によせて ——

この度は、高峰讓吉研究奨励賞を賜り、誠にありがとうございます。日本心血管内分泌代謝学会の先生方、並びにこれまで研究をご支援いただいた先生方に心より御礼申し上げます。

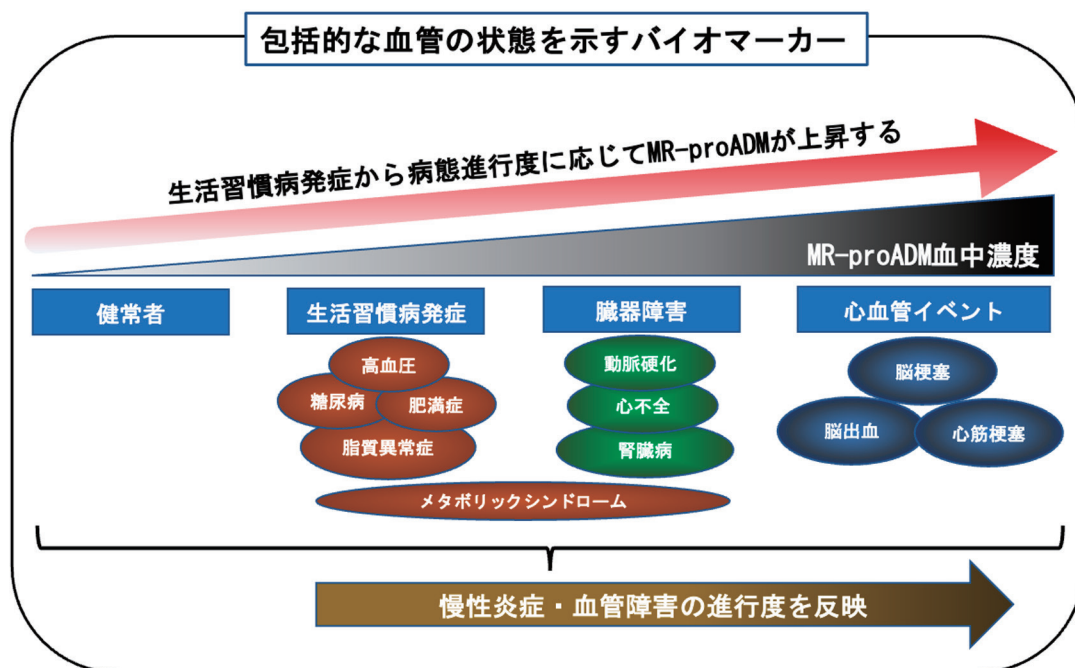
2007年に信州大学大学院医学系研究科循環病態学講座（新藤隆行教授主宰）に進学し、アドレノメデュリン（ADM）と出会いました。私の大学院の研究テーマは、血管内皮細胞におけるADM受容体シグナル経路の解明でした。ADM受容体は、Gタンパク共役型受容体であるCLR（calcitonin receptor-like receptor）に、受容体活性調整タンパクのRAMP（receptor activity-modifying protein）が結合し、機能しています。複数の遺伝子改変マウスを用いた解析の結果、ADM-RAMP2シグナルは、アクチン重合を制御するRhoファミリーの活性を調節することにより、血管保護作用を有することを報告しました（Circulation. 2013）。

ADMシグナルの面白さに触れ、次にヒトにおけるADM受容体と病態の関係について遺伝学的検討を進めたいと考え、現在の所属に異動しました。現在は、大規模ゲノムコホート研究に携わり、疫学データを用いた解析に取り組んでいます。その成果として、RAMP2とCLRのSNPが、脳卒中と関連することを報告しました（J Atheroscler Thromb. 2017）。これらの結果は、ADM受容体に作用する分子が、血管保護や循環器疾患に対する新たな治療標的となることを期待させるものです。

ADMは、治療薬としての利用が期待されていますが、炎症惹起時や虚血時に発現上昇することから、血中バイオマーカーとしての利用も期待できます。ADMは血中半減期が短く、ルーチン検査に用いるにはハードルがありますが、ADM前駆物質であるMid-regional pro-ADM（MR-proADM）は、血中半減期が長く、安定して血中濃度を測定することが可能となります。MR-proADMの測定法は限られており、国内での研究は、進んでいません。その現状を打破するため、海外で一般的な測定法とされているKRYPTORを導入しました。さらに、KRYPTORに依存しない測定法として、質量分析を用いた測定法を樹立しました（J Pharm Biomed Anal.

2020)。コホート研究で採取した検体を用い、日本人 2000 名以上の MR-proADM を測定し、内臓脂肪との関係 (Int J Environ Res Public Health. 2020)、血管ステイフネスとの関係 (Sci Rep 2021) を報告しました。さらに研究が進めば MR-proADM が、包括的な血管機能を示すバイオマーカーになることが期待されます。今後も MR-proADM を新規バイオマーカーとして臨床応用につながる研究を進めてまいります。

今回の受賞を励みとし一層精進すると同時に、今後は日本心血管内分泌代謝学会の先生方と共同研究を展開できるよう努めてまいります。今後とも皆様のご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



受賞者-1

石塚 理人 先生 (東京大学医学部附属病院循環器内科)

受賞演題

「心筋細胞のβアレスチン偏向性受容体 CXCR7 は心筋梗塞後リモデリングを抑制する」

略歴



- |       |                   |              |
|-------|-------------------|--------------|
| 2011年 | 千葉大学医学部医学科        | 卒業           |
| 2011年 | 日本赤十字社医療センター      | 初期/循環器内科後期研修 |
| 2016年 | 東京大学大学院医学系研究科博士課程 | 入学           |
| 2020年 | 東京大学大学院医学系研究科博士課程 | 修了           |
| 2020年 | 日本学術振興会           | 特別研究員        |
| 2021年 | 東京大学医学部附属病院       | 特任臨床医        |

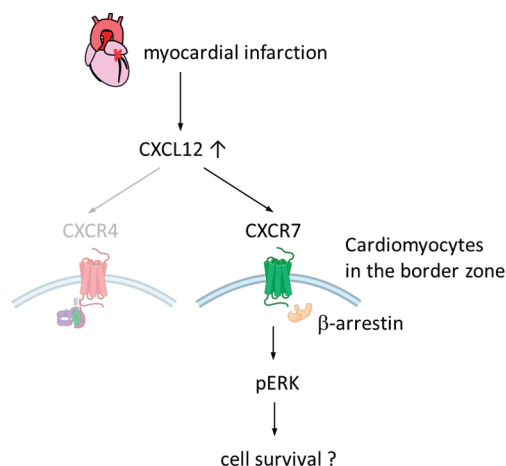
— 研究内容および抱負 —

このたびは第25回日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞にご選出いただき、誠にありがとうございます。学会長の児島将康先生、ならびに選考委員の皆様にご心より感謝申し上げます。

私の研究は、ケモカイン受容体 CXCR7 に着目しています。というのも CXCR7 は7回膜貫通型受容体としては珍しく、G 蛋白と共役せずかつβアレスチンとのみ共役する、βアレスチン偏向性受容体 (β-arrestin biased receptor) であるためです。当教室で池田祐一先生が副腎皮質における CXCR7 の作用を報告しております (Cell, 2013)。近年、βアレスチンにも独自のシグナルを有することが判明し、心保護作用が報告されています。CXCL12 (=SDF-1) は CXCR4 と CXCR7 とに共通のリガンドで、投与によりマウス心筋梗塞の表現型が改善したとされます。その作用の主体は、G 蛋白と共役する CXCR4 と考えられてきましたが、CXCR4 には血管新生と炎症増悪の両面の作用があり一致しません。もう一方の受容体である CXCR7 の心筋梗塞への作用は未だ不明です。今回、心筋梗塞におけるβアレスチン偏向性受容体 CXCR7 の役割を解明することを目的としています。

結果、CXCR7 は、マウス心臓への bulk RNAseq によれば7回膜貫通型受容体の中で発現が最も多く、一細胞 RNAseq では特に心筋細胞と線維芽細胞で発現が多いことがわかりました。そこで心筋細胞特異的 CXCR7 ノックアウトマウスを作成した所、心筋梗塞が増悪しました。心筋細胞の CXCR7 が梗塞後リモデリング抑制に働いている事が示唆され、その機序として CXCR7 は ERK を介し細胞生存に働いていると推測しています。

今後は、未知である CXCR7 の詳細なシグナルを更に解明することで、心筋梗塞の治療に直接応用できるような研究にできたらと考えております。今回の受賞を励みにして研究に邁進していく所存ですので、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



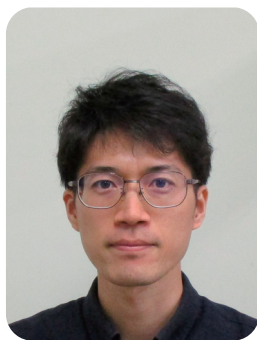


受賞者-2

川上 亮 先生 (群馬大学医学部附属病院)

受賞演題

「腎臓の脂肪酸取り込み機構全容の解明」



### 略歴

2014年	群馬大学医学部卒業
2014年—2016年	国立病院機構高崎総合医療センター 初期研修医
2016年—2018年	国立病院機構高崎総合医療センター 循環器内科 医員
2018年—現在	群馬大学医学部附属病院 循環器内科医員

### — 研究内容および抱負 —

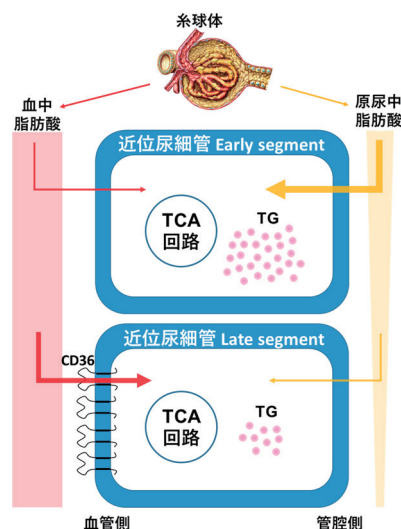
意外かもしれませんが、腎臓の安静時エネルギー消費量は心臓に匹敵し、人体で最大です。そのエネルギーの多くは脂肪酸代謝に依存しますが、不思議なことに、腎臓の脂肪酸取り込み機構は未解明でした。私たちは、主にマウスを用いて、腎臓の脂肪酸代謝に関する3つの基礎的な現象を明らかにしました。

1. 腎尿細管上皮細胞は、血液と原尿の両方から脂肪酸を取り込む
2. ネフロン近位部、遠位部ともに大量の中性脂肪蓄積機能を有する
3. 腎臓には、病的腎であっても、原尿中の脂肪酸を完全に再吸収する機構が存在する

血液からの脂肪酸取り込みには、心臓と同じく CD36 が重要な役割を果たす一方、原尿からの取り込みは CD36 非依存的事であることもわかりました。糖やタンパクと異なり、いかなる病態でも“脂肪酸尿”の報告がないことから、脂肪酸再吸収機構は非常に強固であると考えられます。脂肪酸消費臓器としてだけでなく、脂肪酸蓄積臓器としての腎臓の新たな役割が明らかとなり、全身の脂肪酸代謝恒常性制御における腎臓の重要性が示唆されます。

これまで腎臓の脂肪酸取り込み機構が解明されなかった要因として、二方向から脂肪酸を取り込むという特殊性が挙げられます。本研究が、これから腎臓の脂肪酸代謝研究が発展する転機となることを期待します。現在は、腎臓の脂肪酸取り込みに関わる新たな分子の同定や、蓄積した中性脂肪がどのように代謝されるかについて研究を進めています。今後は、腎臓の脂肪酸再吸収や蓄積機能が、腎疾患や脂質異常症の発症・進展に及ぼす影響についても明らかにしたいです。

この場をお借りして、共同研究者の先生方、日頃ご指導下さる先生方に厚く御礼申し上げます。今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。



受賞者 - 3

片桐 美香子 先生 (東京大学大学院医学系研究科 循環器内科)

受賞演題

「シングルセル分子病理解析による心臓サルコイドーシスの病態解明とバイオマーカーの同定」



略歴

2009年	九州大学医学部医学科卒業
2009年	板橋中央総合病院 初期研修医
2011年	板橋中央総合病院 循環器内科 後期研修医
2014年	東京大学大学院医学系研究科医学博士課程 (循環器内科学) 入学
2015年	休学・渡米
2017年	米国ヴァンダービルト大学 循環器内科 Volunteer researcher (iPS 研究)
2018年	帰国・復学

—— 研究内容および抱負 ——

このたびは第25回日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞という栄えある賞を賜りまして、大変光栄に存じます。選考委員並びに関係者の皆様に御礼申し上げます。

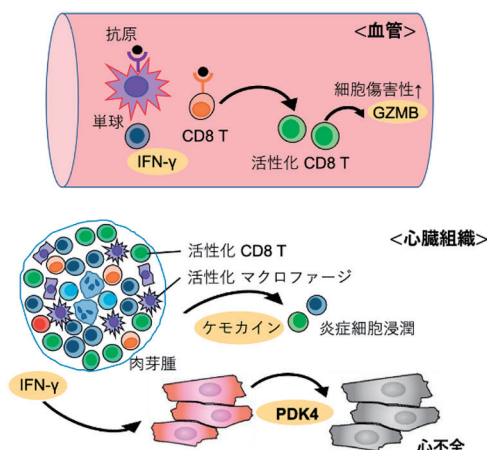
私達の研究室では、ヒト心臓検体を用いたシングルセル解析に取り組んで参りました。

サルコイドーシスは原因不明の全身性肉芽腫性疾患であり、心臓病変は心室性不整脈や心不全をきたし、本疾患の主な死因となっています。ステロイド治療により予後が改善するため早期の診断が重要ですが、心筋生検による陽性率は20%程度と低く、侵襲の小さな検査で測定可能な新たなバイオマーカーが必要であると考え、本研究を開始しました。

今回の研究では、心臓サルコイドーシス患者から採取した末梢血単核細胞のシングルセル RNA-seq 解析を行い、CD8 T 細胞において Naïve 分画が有意に減少し、Effector Memory 分画が増加して活性化していることを見出しました。TCR-seq 解析では、CD8 Memory T 細胞における TCR レパトアの著明なクローン増殖を認め、病理組織のマルチプレックス Spatial 解析からも、組織での CD8 T 細胞の増加と活性化を認めたことより、本疾患の病態に CD8 T 細胞が強く関与していることを示しました。また、心臓組織の空間的トランスクリプトーム解析を行ったところ、肉芽腫以外的心筋部分において JAK2・FOXO3・PDK4 遺伝子の発現が上昇しており、これは IFN- $\gamma$  シグナルが心臓サルコイドーシス病態の上流にあることを示唆し、肉芽腫の有無によらない心臓サルコイドーシスの組織診断を可能とするバイオマーカーとなり得ると考えています。

今回の受賞を励みにして、これからも循環器内科研究に尽力したいと考えております。引き続きご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、本研究においてご指導いただきました、東京大学循環器内科の小室一成教授、野村征太郎先生をはじめ、ご協力いただきました皆様に改めて心より御礼申し上げます。



受賞者 - 4

木塚 貴浩 先生 (佐賀大学医学部循環器内科)

受賞演題

「可溶性エポキシドヒドロラーゼをターゲットとしたペプチドワクチンは心筋梗塞後のリモデリングを抑制する」



略歴

2013年	熊本大学医学部医学科卒業
2019年	佐賀大学大学院医学研究科博士課程 早期修了
2020年	佐賀大学医学部附属病院 循環器内科 特任助教
2021年	Postdoctoral scientist - Nationwide Children's Hospital, Ohio State University, Ohio, USA

— 研究内容および抱負 —

このたびは第25回日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞にご選出いただき、誠にありがとうございます。大変名誉な賞をいただき選考の先生方並びに関係者の方々に御礼申し上げます。

ワクチン接種療法は、長期的な効果が見込めるので服薬アドヒアランスの問題を解決する可能性があります。しかし、心筋梗塞の治療を目的としたワクチン療法ははまだ報告されていません。私たちは野出孝一教授が研究されている可溶性エポキシドヒドロラーゼ (sEH)、エポキシエイコサトリエン酸 (EET) に関する研究をワクチン治療へ応用いたしました。

【研究内容】

我々は、sEH ワクチンによる血管新生は、心筋梗塞による傷害の範囲を縮小し、心筋梗塞後の心臓リモデリングを予防すると仮説を立てました。

【方法と結果】

アミノ酸配列に基づいて sEH ペプチドワクチンを作成し、ラットにワクチンを投与しました。そして ELISA でワクチンが抗 sEH 抗体を誘導することを示しました。さらに質量分析でワクチンにより誘導された抗体が中和抗体であることを確認しました。

次いで、ワクチンを投与したラットに心筋梗塞を作成し、ワクチンの効果を評価しました。ワクチン接種群は、心エコーにて左室の心機能低下を抑制しました。さらに病理学的評価にて微小血管数の増加を認め、心筋梗塞誘発性の線維化を抑制しました。

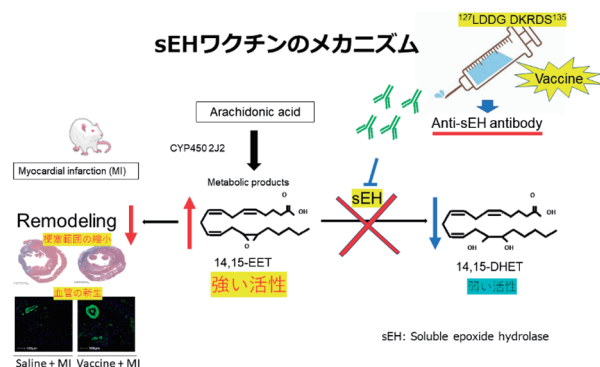
【結論】

心筋梗塞に対する sEH ワクチン療法は、心臓リモデリングを抑制させることを示しました。このワクチンは、心筋梗塞後の心不全を予防するための治療の選択肢になることが期待できます。

【抱負】

私たちの作製したワクチンを臨床応用するためには、さらなる改良を行っていく必要があります。今後、ワクチンの作成方法や副作用を十分に検討してまいります。さらに心筋梗塞だけでなく、その他の脳血管疾患への応用を目指してまいります。

最後になりますが、本研究においてご指導いただきました、佐賀大学循環器内科野出孝一先生、白木綾先生、尾山純一先生、田中敦史先生、大阪大学健康発達医学寄附講座中神啓徳先生にこの場をお借りして改めて心より御礼申し上げます。この度は誠にありがとうございました。



受賞者-5

杉田 純一 先生（東京大学医学部附属病院循環器内科）

受賞演題

「心臓マクロファージが不整脈による心突然死を防ぐ機構の解明」



略歴

2007年東京大学医学部医学科卒業。  
東京大学医学部附属病院、慶應義塾大学病院での初期研修を経て、日本赤十字社医療センターで後期研修を終える。  
2015年東京大学大学院医学系研究科内科学専攻博士課程修了。  
その後、東京大学医学部附属病院循環器内科にて臨床、基礎研究に従事。  
2020年より内閣府宮内庁上皇職上皇侍医。

—— 研究内容および抱負 ——

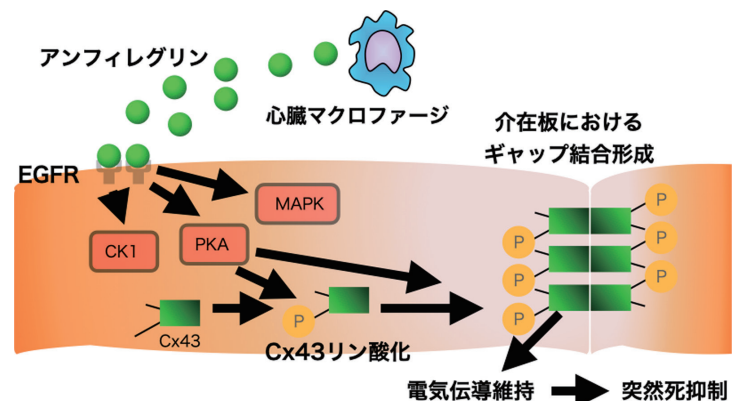
この度は、第25回日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞に選出頂き、誠にありがとうございます。選考委員の先生方ならびに関係者の方々に御礼申し上げます。

私達の研究室では、臓器間ネットワークに注目して心不全という病態を理解することを目指しています。私達は、以前の報告で、心臓にストレスが負荷されたときに、心臓から神経を介して脳を経由した後に腎臓へストレスが伝わり、腎臓から伝達物質が放出され、最終的に心臓内に存在する心臓保護作用を持つマクロファージが活性化されるという、心臓・脳・腎臓のネットワークによる心臓ストレス応答機構を明らかにしました。

本研究では、そのネットワークの中で、心臓常在性マクロファージが分泌するアンフィレグリンという上皮成長因子受容体リガンドが心臓の電気伝導に関与するメカニズムについて明らかにしました。心臓の電気伝導はコネクシン蛋白により構成されるギャップ結合が担っています。アンフィレグリンはコネクシン蛋白の中でも心房筋、心室筋に発現するコネクシン43に特異的に作用し、コネクシン43をリン酸化することでギャップ結合の安定化を促進して不整脈発生を抑制し、突然死を防ぐことが分かりました。

今後は、心不全時に応答する臓器間ネットワークの中でも特に脳へ注目し、心不全時の脳内ストレス機構、また、心臓から脳に至るまでの神経によるストレス感知機構を明らかにすることで、新しい心不全診断法や治療法を開発することを目標にしています。今回の受賞を励みにして、さらに研究に邁進していく所存です。今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

最後にこの場を借りて、ご指導いただいた東京大学循環器内科小室一成先生、藤生克仁先生、千葉大学疾患システム医学真鍋一郎先生に深く感謝申し上げます。



# 日本心血管内分泌代謝学会役員名簿

## ■理事長

伊藤 裕 慶應義塾大学医学部腎臓内分泌代謝内科

## ■副理事長

吉村 道博 東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科

## ■理事

市原 淳弘 東京女子医科大学内分泌疾患総合医療センター高血圧・内分泌内科

小川 佳宏 九州大学大学院医学研究院病態制御内科学

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科分子細胞代謝学分野

柏原 直樹 川崎医科大学腎臓・高血圧内科

栗原 裕基 東京大学大学院医学系研究科生化学分子生物学講座代謝生理化学分野

桑原宏一郎 信州大学医学部循環器内科学教室

児島 将康 久留米大学分子生命科学研究所遺伝情報研究部門

小室 一成 東京大学大学院医学系研究科循環器内科学

斎藤 能彦 奈良県立医科大学第一内科

下澤 達雄 国際医療福祉大学成田病院臨床検査科

新藤 隆行 信州大学医学部医学科循環病態学教室

田村 功一 横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学

西山 成 香川大学医学部薬理学

深水 昭吉 筑波大学生存ダイナミクス研究センター

中川 修 国立循環器病研究センター研究所分子生理部

益崎 裕章 琉球大学大学院医学研究科内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科)

南野 徹 順天堂大学大学院医学研究科循環器内科

向山 政志 熊本大学大学院生命科学研究部腎臓内科学

柳沢 正史 筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構(WPI-IIIIS)

樂木 宏実 大阪大学大学院医学系研究科老年・総合内科学

## ■監事

菅波 孝祥 名古屋大学環境医学研究所分子代謝医学分野

長瀬 美樹 杏林大学医学部解剖学教室(肉眼)

## ■幹事

泉 裕一郎 熊本大学病院地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座

岸 拓弥 国際医療福祉大学福岡保健医療学部

徳留 健 国立循環器病研究センター研究所生化学部

■名誉会員【37名】

荒川規矩男	稲上 正	稲田 満夫	井村 裕夫	岩尾 洋	梅村 敏	江藤 胤尚
荻原 俊男	片山 茂裕	寒川 賢治	木之下正彦	小島 至	齊藤 壽一	猿田 享男
島本 和明	鈴木 洋通	高橋 伯夫	竹田 亮祐	田中 一成	富田 公夫	永井 良三
中尾 一和	中川 雅夫	成瀬 光栄	名和田 新	平田結喜緒	藤田 敏郎	眞崎 知生
松尾 壽之	松岡 博昭	宮森 勇	村上 和雄	矢崎 義雄	泰江 弘文	吉永 馨
吉見 輝也	吉村 学					

■功勞評議員【99名】

芦澤 直人	安部 陽一	飯利 太朗	池本 文彦	石川 三衛	石田 均	石橋みゆき
伊藤 貞嘉	伊藤 宏	井上 達秀	今泉 勉	今城 俊浩	岩崎 泰正	岩本 安彦
内田 健三	浦 信行	浦田 秀則	大磯ユタカ	岡村 富夫	小川 久雄	小野 美明
柏木 厚典	川口 秀明	河野 雄平	河邊 博史	河南 洋	菊池健次郎	木越 俊和
木曾 良明	北村 和雄	木村 定雄	木村 時久	久代登志男	熊井 俊夫	熊谷 裕生
倉林 正彦	上月 正博	河野 雅和	後藤 淳郎	小林 直彦	笹野 公伸	塩之入 洋
重富 秀一	七里 眞義	菅原 照	瀬戸 信二	相馬 正義	高木耕一郎	高須 信行
高野加寿恵	高原 二郎	高柳 涼一	竹越 襄	武田 仁勇	千原 和夫	辻井 悟
薦本尚慶	東條 克能	徳留 悟朗	戸恒 和人	中村 元行	成宮 周	西川 哲男
西村 和修	萩原 啓実	橋爪 潔志	橋本 隆男	林 晃一	檜垣 実男	久留 一郎
平井 愛山	平田 恭信	廣江 道昭	広瀬 茂久	福井 清	福田 昇	藤原 久義
榊田 出	松浦 秀夫	松澤 佑次	水野 兼志	光山 勝慶	南野 直人	宮崎 滋
宮崎 瑞夫	宮田 篤郎	村上 治	村木 篁	森井 成人	森瀬 敏夫	保嶋 実
山路 徹	山下 博	山田 敬行	山本 格	家森 幸男	吉林 宗夫	吉政 孝明
渡辺 毅						

■評議員【169名】

赤澤 宏	浅原 哲子	荒井 宏司	有馬 秀二	安藤 孝	池田 惠一	池田 康将
石上 友章	石川 義弘	石田 純治	泉 康雄	泉 裕一郎	泉家 康宏	市原 淳弘
一色 政志	伊東 宏晃	伊藤 裕	井上 元	上田 陽一	白井 健	海老原 健
大石 充	大谷健太郎	大津留 晶	尾形真規子	小川 佳宏	荻野 和秀	小倉彩世子
尾上 健児	柿添 豊	笠原 正登	柏原 直樹	方波見卓行	勝田 秀紀	勝谷 友宏
加藤 丈司	神出 計	神吉 昭子	唐島 成宙	川上 利香	岸 拓弥	岸本 一郎
北見 裕	衣川 徹	木下 秀之	日下部 徹	栗原 裕基	桑原宏一郎	栗原 孝成
児島 将康	此下 忠志	小松 弥郷	小室 一成	斎藤 能彦	酒井 寿郎	坂本 昌也
篠村 裕之	佐田 政隆	佐藤 敦久	佐藤 貴弘	佐藤 文俊	佐藤 稔	沢村 達也
柴田 洋孝	島袋 充生	清水 逸平	下澤 達雄	下平 雅規	新藤 隆行	菅波 孝祥
菅原 明	杉本 研	杉山 徹	須田 道雄	曾根 正勝	園山 拓洋	染川 智
高橋 和広	高橋 克敏	高橋 貞夫	高橋 将文	鷹見 洋一	竹越 一博	武田 憲文
竹田 征治	田中 智洋	田中 愛	田辺 晶代	谷山 義明	種本 雅之	田村 功一
田村 尚久	土屋恭一郎	鶴田 敏博	寺田 典生	土居健太郎	東口 治弘	徳留 健
富田奈留也	永江 徹也	中岡 隆志	中神 啓徳	中川 修	中川 眞代	中川 靖章
長瀬 美樹	長田 太助	中谷 公彦	中西 道郎	中野 茂	中元 秀友	永谷 憲歳
中山 智祥	中山 雅文	名越 智古	錦見 俊雄	西村 眞人	西山 成	野出 孝一
長谷川浩二	浜中 一郎	林 登志雄	原田 昌樹	東浦 勝浩	人見 浩史	廣岡 良隆
廣瀬 卓男	深水 昭吉	古橋 眞人	古本 智夫	細田 公則	堀尾 武史	本間康一郎
前島 洋平	榎野 久士	益崎 裕章	三浦伸一郎	水野 雄二	南野 徹	宮内 卓
宮崎 均	宮里 幹也	宮下 和季	宮本 恵宏	向山 政志	宗 友厚	茂木 正樹
森 潔	森 建文	森 泰清	森下 竜一	森本 聡	八十田明宏	柳沢 正史
山下 潤	山原 研一	山本 啓二	山本 浩一	山本 繁樹	横井 秀基	吉賀 正亨
吉田 尚弘	吉田 英昭	吉田 陽子	吉村 道博	吉本 貴宣	米田 隆	樂木 宏実
脇野 修						

■2021年度新入会会員【22名】

有賀 公亮	石塚 理人	梅井 正彦	大塚憲一郎	小野 真	北田 研人	木塚 貴浩
小林 亮太	柴 祐司	蕭 詠庭	白木 綾	田口 朋	常盤 洋之	秦 雄介
林 香	原田 恭弘	深水 大天	武城 怜史	松原 京平	村上 裕輔	山本 毅士
吉江 幸司						

## 第 25 回 日本心血管内分泌代謝学会 評議員・総会 書面審議記録

日 時 : 2021 年 12 月 13 日～12 月 28 日

場 所 : CVEM ホームページ

評議員数 : 181 名

正会員数 : 372 名

### 【承認事項】

第 1 号議案 役員選任の件

第 2 号議案 次期理事長・副理事長の件

第 3 号議案 名誉会員・功労評議員の件

第 4 号議案 評議員の件

(1) 新評議員について

(2) 再任評議員について

第 5 号議案 学術総会会長の件

(1) 第 28 回 (2024 年度) 学術総会会長の件

第 6 号議案 令和 2 年度 (2020 年度) 会計報告の件

(1) 令和 2 年度 (2020 年度) 一般会計

(2) 第 24 回 (2020 年度) 学術総会会計

### 【報告事項】

第 1 号議案 各種委員会設立の件

第 2 号議案 長期会費未納会員の件

第 3 号議案 研究賞の件

第 4 号議案 高峰讓吉賞・高峰讓吉研究奨励賞・中尾賞／永井賞選考委員の選任について

第 5 号議案 2022 年度若手研究奨励賞(YIA)選考委員の選任について

第 6 号議案 学術総会準備状況の報告

第 7 号議案 会員数の現状報告

第 8 号議案 その他

(1) 日本心血管内分泌代謝学会の研究賞に関する内規の改訂

(2) 会員連絡号の件

(3) 日本心血管内分泌代謝学会ホームページの件

2021 年度評議員会・総会については新型コロナの影響で第 25 回学術総会が web 形式となったため通常の開催ができず書面審議の形態となった。評議員会・総会の資料は CVEM ホームページに掲載し、書面審議依頼書をメール添付またはメール登録のない会員宛郵送により全会員に告知した。審議期限の 12 月 28 日までに評議員 60 名、一般会員 32 名から承認の回答があり、また、審議依頼書に期限までに回答のない場合は承認とみなす旨記載したのでほぼ全会員の承認が得られたものとみなされた。定款第 21 条で評議員会の承認には 2/3 以上の出席で過半数の賛成 (60 名以上)、定款第 26 条で総会の承認には 1/3 の出席で過半数の賛成 (92 名以上)が必要とあるので、今回の結果は評議員会と総会での承認が得られたものと判断できると考えられる。各承認事項を以下に示す。

## 【承認事項】

### 第1号議案 役員選任の件

今年度総会で年齢規定により任期満了退任となる理事は北村和雄理事(宮崎大学)であることが報告された。4年の任期を満了する理事は桑原宏一郎(信州大学)、児島将康(久留米大学)、下澤達雄(国際医療福祉大学)、新藤隆行(信州大学)、田村功一(横浜市立大学)、中川 修(国立循環器病研究センター研究所)、西山成(香川大学)、深水昭吉(筑波大学)、樂木宏実(大阪大学)の各理事で、いずれも再任されることが承認された。4年の任期を満了する監事は菅波孝祥(名古屋大学)と長瀬美樹(杏林大学)の各監事、4年の任期を満了する幹事は岸 拓弥(国際医療福祉大学)と徳留 健(国立循環器病研究センター研究所)の各幹事と報告された。

新理事や新監事候補者の該当者はなかった。第26回学術総会会長付幹事候補として泉 裕一郎評議員(熊本大学病院 地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座)が承認された。

### 第2号議案 次期理事長・副理事長の件

今年度の総会で2年の任期を満了する理事長・副理事長は伊藤 裕理事長と吉村道博副理事長であると報告された。次期理事長として伊藤 裕現理事長、次期副理事長として吉村道博現副理事長が継続して務めることが提案され、承認された。任期は2021年12月総会から2023年総会までの任期となる。

### 第3号議案 名誉会員・功労評議員の件

今年度満70歳を迎える功労評議員で名誉会員の候補者は該当者なしと報告された。功労評議員候補者として芦澤直人(日本赤十字社 長崎原爆病院)、今城俊浩(今城内科クリニック)、熊谷裕生(防衛医科大学校)、上月正博(東北大学)、小林直彦(小林内科クリニック)、斎藤能彦(奈良県立医科大学)、笹野公伸(東北大学)、萩原啓実(桐蔭横浜大学)、久留一郎(鳥取大学)、福田 昇(日本大学)、光山勝慶(熊本大学)、宮田篤郎(鹿児島大学)、山田敬行(医療法人 山田クリニック)、吉林宗夫(瀬田三愛小児科)の14名の各評議員がそれぞれ承認された。

### 第4議案 評議員の件

#### (1) 新評議員について(任期:2021年12月総会~2025年総会)

令和3年度新評議員候補者として以下2名が承認された。

吉田尚弘、神吉昭子の各氏。

#### (2) 再任評議員について(任期:2021年12月総会~2025年総会)

4年の任期を満了する任期満了評議員として、以下の41名の再任が承認された。

安藤 孝、泉 康雄、伊東宏晃、井上 元、臼井 健、笠原正登、勝谷友宏、神出 計、唐島成宙、北見 裕、児島将康、小松 弥郷、酒井寿郎、坂本昌也、篠村裕之、佐藤文俊、島袋充生、菅波孝祥、須田道雄、種本雅之、田村尚久、土居健太郎、永江徹也、永谷憲歳、中山雅文、野出孝一、浜中一郎、原田昌樹、人見浩史、古本智夫、細田公則、本間康一郎、三浦伸一郎、水野雄二、宮下和季、宮本恵宏、宗 友厚、森 建文、八十田明宏、山下 潤、山本啓二の各評議員。

#### (3) 評議員資格審査委員選任について

2年の任期を満了する評議員資格審査委員は向山政志委員長、岸本一郎委員、西山 成委員であると報告された。次期委員(任期;2021年総会~2023年総会)として向山政志委員長、岸本一郎委員、西山 成委員が再任された。



## 第5号議案 学術総会会長の件

### (1) 第28回(2024年度)学術総会会長の件

第28回(2024年度)学術総会会長に小川佳宏理事(九州大学 大学院医学研究院 病態制御内科学)が承認された。

## 第6号議案 令和2年度(2020年度)会計報告の件

### (1) 令和2年度(2020年度)一般会計

令和2年度の一般会計について、前期繰越金 20,680,821 円、会費収入 1,987,000 円、受取利息 108 円、高峰賞寄附金 1,000,000 円、中尾賞/永井賞寄附金 100,000 円、学術総会会計繰入金 0 円、収入合計 23,717,929 円、当期収入は 3,087,108 円、支出は印刷費 15,400 円、通信運搬費 96,596 円、人件費 1,084,000 円、旅費交通費 0 円、YIA 表彰費(副賞) 500,000 円、YIA 表彰費(記念品代) 105,820 円、高峰賞関連費 792,450 円、中尾賞・永井賞関連費 100,000 円、負担金(振込手数料) 27,940 円、各種委員会・会議費 0 円、事務局家賃 250,000 円、事務費 145,200 円、支出合計 3,117,406 円、当期収支差額-30,298 円、次期繰越収支差額 20,600,523 円であると報告された。

### (2) 第24回(2020年度)学術総会会計

第24回日本心血管内分泌代謝学会学術総会は、当初国際学会を予定していたが新型コロナの影響で完全 web 形式となった。第28回日本血管生物医学会学術集会、第37回国際心臓研究学会日本部会および International Society for Applied Cardiovascular Biology (ISACB) 2020 との合同開催で実施され、403名の参加者があり、CVEM 単独で 81名の参加者であった。学術総会の収支は、収入が 4,771,236 円、支出は 4,771,236 円で、納税充当引当金 795,302 円は学術総会会計繰入金口座に入金されたことの報告であった。

菅波監事と長瀬監事により行われた監査より、一般会計報告および学術総会の会計処理は適正に行われている旨監査報告書が示され、上記会計報告は承認された。

各報告事項を以下に示す。

#### 【報告事項】

### 第1号議案 各種委員会委員追加の件

本学会の執行部組織である常設3委員会に以下の委員(若手委員\*を含む)を追加することが6月の持ち回り理事会で承認されていることが報告された。

#### ◆庶務委員(学会員の資格等に関する事項を取り扱う目的で設立)

下澤達雄	(国際医療福祉大学 成田病院 臨床検査科)
西山 成	(香川大学 医学部香川大学 医学部 薬理学)
桑原宏一郎	(信州大学 医学部 循環器内科学教室)
岸 拓弥	(国際医療福祉大学 福岡保健医療学部)
栗原孝成*	(熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学)
中野大介*	(香川大学 医学部 薬理学)
吉江幸司*	(信州大学病院 循環器内科)
小山晃英*	(京都府立医科大学 大学院医学研究科 地域保健医療疫学)

#### ◆財務委員会(学会の財務に関する事項を取り扱う目的で設立)

中川 修	(国立循環器病研究センター研究所 分子生理部)
名越智古*	(東京慈恵会医科大学 循環器内科)

- ◆学術委員会（学会の学術に関する事項を取り扱う目的で設立）
- 小川佳宏（九州大学 大学院医学研究院 病態制御内科学）  
 菅波孝祥（名古屋大学 環境医学研究所 分子代謝医学分野）  
 清水逸平\*（順天堂大学 循環器内科）  
 河原崎和歌子\*（東京大学 先端科学技術研究センター臨床エピジェネティクス講座）  
 木内謙一郎\*（慶應義塾大学 医学部 腎臓内分泌代謝内科）  
 林 香\*（慶應義塾大学 医学部 腎臓内分泌代謝内科）

## 第2号議案 長期会費未納会員の件

2016年から2017年までの会費未納者名(一般会員17名、評議員2名)については、前年度末(令和2年3月末)までに会費納入いただかず自動的に退会処理したことが報告された。今後も3年以上連続して会費未納者で会費納入にご賛同いただけない場合は自動的に退会処理させていただく旨報告された。

## 第3号議案 研究賞の件

### 第3号議案(1) 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・永井良三賞の件

第25回高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・第3回永井良三賞選考委員会は2021年8月16日web会議で開催され、受賞者が決定された。

#### ◆第25回（2021年度）高峰譲吉賞 受賞者

栗原裕基（教授） 東京大学 大学院医学系研究科生化学分子生物学講座 代謝生理化学分野

#### ◆第25回（2021年度）高峰譲吉研究奨励賞 受賞者

鮎澤信宏（特任助教） 東京大学 先端科学技術研究センター臨床エピジェネティクス講座

小山晃英（講師） 京都府立医科大学 大学院医学研究科 地域保健医療疫学

#### ◆第3回（2021年度）永井良三賞 受賞者

該当者なし

## 第4号議案 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞／永井賞選考委員の選任について

### ◆2022年度年度高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞／永井賞 選考委員の件

選考委員長：伊藤 裕（慶應義塾大学 医学部 腎臓内分泌代謝内科）

年次会長：向山政志（熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学）

継続委員：下澤達雄（国際医療福祉大学 成田病院）

田村功一（横浜市立大学 医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学）

南野 徹（順天堂大学 大学院医学研究科 循環器内科）

候補者名：任期2年 2021年12月総会～2023年総会まで

市原淳弘（東京女子医科大学 内分泌疾患総合医療センター 高血圧・内分泌内科）

栗原裕基（東京大学 大学院医学系研究科 生化学分子生物学講座代謝生理化学分野）

桑原宏一郎（信州大学 医学部 循環器内科学教室）

## 第5号議案 2022年度 若手研究奨励賞 選考委員の選任について

### ◆2022年度 若手研究奨励賞（YIA） 選考委員の件

選考委員長（2022年度学術総会会長）：

向山政志会長（熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学）

継続委員：任期2年 2021年3月総会～2022年総会まで

栗原孝成(熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学)

中野大介(香川大学 医学部 薬理学)

野村征太郎(東京大学 医学部附属病院 循環器内科)

候補者名：任期2年 2021年12月総会后～2023年総会まで

有馬勇一郎(熊本大学大学院 生命科学研究部 循環器内科)

武田朱公(大阪大学 大学院医学系研究科 臨床遺伝子治療学講座)

吉田陽子(順天堂大学 大学院医学研究科 先進老化制御学講座)

## 第6号議案 学術総会準備状況の報告

### 第26回(2022年度)学術総会 向山政志会長(熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学)

開催日；2022年10月12日

場所；京都国際会館(京都市)

国際高血圧学会(ISH)2022 京都のサテライトシンポジウムとして開催

### 第27回(2023年度)学術総会 下澤達雄会長(国際医療福祉大学 成田病院 臨床検査科)

これまでのやり方を変えて、1年間を通じてシリーズ的に教育セミナー30分、一般講演30分を毎月1回開催を計画している。高峰譲吉賞等やYIAの受賞講演および評議員会・総会は11月～12月に開催する予定。

## 第7号議案 会員数の現状報告

2021年10月23日現在

正会員	372名	(年会費	3,000円)	
評議員	154名	(年会費	5,000円)	※理事・監事・幹事除く
理事	22名	(年会費	10,000円)	
監事	2名	(年会費	5,000円)	
幹事	3名	(年会費	5,000円)	
功劳評議員	85名			
名誉会員	37名			
会員合計	675名	(2021年1月12日時点では698名)		
全会員が年会費を納入した場合		会費収入	2,131,000円	
参考：休会中の会員	45名			

## 第8号議案 その他

### (1) 日本心血管内分泌代謝学会の研究賞に関する内規の改訂

選考基準(9)で、「中尾一和賞と永井良三賞は交互に隔年1名の授賞とする。なお、これらの賞は2016年度から2025年度までとする。」を現状に則して「中尾一和賞と永井良三賞は交互に隔年1名の授賞とする。なお、これらの賞は2016年度から各賞5名の受賞者までとする。」に改定することが理事会で承認されたことが報告された。

### (2) 会員連絡号の件

第43回理事会(2019年12月13日開催)で会員連絡号が冊子体からホームページ掲載による電子媒体へ変更することが承認されました。2021年度の連絡号は2月末になる予定です。

### (3) 日本心血管内分泌代謝学会 ホームページの件

ホームページアドレス：<http://square.umin.ac.jp/cvem/>

掲載のご要望やご意見など、事務局までお寄せ下さい。